

修士論文概要 フリースクールにおける子どもの 教育支援に関する研究：東京シューレ（王子）を 事例にして

著者	敖 愛琳
雑誌名	茗溪社会教育研究
号	6
ページ	81-85
発行年	2015-06-30
URL	http://hdl.handle.net/2241/00129858

フリースクールにおける子どもの教育支援に関する研究 —東京シューレ（王子）を事例にして—

敖 愛琳*

1. 問題の所在と研究の目的

本研究は東京シューレ（王子）を事例として取り上げ、そこで行われている教育活動を分析し、その教育支援は子どもにどのような意義を持つのかを明らかにすることを目的とする。東京シューレ（王子）の教育活動の分析を通じて、日本におけるフリースクールがオルタナティブ教育として発展する方向性と可能性を探究し、教育の多様化への示唆を得る。

日本におけるフリースクールは、不登校の子どもなどを受け入れてきた民間の教育施設であることが、諸外国に点在しているフリースクールに比して特徴的である（吉井 2004）。欧米におけるフリースクールは権威による教育を排し、民主的な運営によって一般の学校で抑圧されがちな自由や個性を尊重し、このニーズに即した教育を実現するために設立されたものである。その点で、デモクラティック・スクール(democratic school)とも呼ばれている（沖田 1997）。欧米の自由な学校とは違い、日本のフリースクールは、不登校の子どものための一時的な避難所として位置づけられている。

しかしながら、フリースクールの社会的意義について、奥地(2009)は①不登校の子どもたちに居場所を提供し学び育つためのサポート、安心できるつながり、そして自立への支援を行ってきたこと、②教育選択肢を広げたこと、③子ども中心の教育を実際に作り出すことで、上からのお仕着せ教育や点数競争の教育の見直しなど、既成の教育への問題提起を实践したこと、④上(国)ではなく、親や市民自ら考え、作っていくものという文化を発信できることという四点を指摘している。フリースクールは不登校の子どもたちの居場所だけではなく、子ども中心の教育を行い、彼らの自立を支える学びの場でもある。

奥地(2005)は、「特別な子どもの病気」と捉えられてきた不登校を、「生き方」と再定義し、「生き方」を保障するために多様な子どもたちのための多様な教育を実現することを提唱している。奥地(2009)によるとフリースクールで行う子ども中心の教育とは、国家社会のための人材育成ではなく、その子ども自身のために存在し、子どもの自己決定が尊重され、興味、関心を大切に、子どもが参加・参画してつくる教育であり、主体的な人間の形成が目指されている。そこで、不登校の子どもたちは一人ひとり違っている存在として認められ、自分らしく、ありのままにいられることが強調された。フリースクールに通っていた経験を持つ不登校の子どもたちの自分自身に関する語りから見ると、フリースクールは子どもの意志を十分に尊重し、子どもが自分らしくいられる場であることがわかる。その点は学校に行けない子どもたちがフリー

* 筑波大学大学院博士前期課程教育学専攻2年

スクールに行くことができるのもっとも重要な要素である。

先行研究では、日本のフリースクールを不登校対策機関として捉える研究が多い。しかし、奥地は学校復帰を求める不登校対策をやめて、学校に行かないという生き方も権利として認めていくことを主張している。2003 年中央教育審議会は「今後の不登校への対応のあり方について」では、不登校問題を「こころの問題」としてだけでなく、「進路の問題」として捉え直した。さらに、2014 年 7 月政府の教育再生実行会議の第五次提言「今後の学制等の在り方について（第五次提言）」では、フリースクールの位置付けと就学義務や公費負担のあり方を検討することが述べられている。その検討の結果により、今後の日本におけるフリースクールの位置付けが変わっていくのではないかと考えられる。

したがって、本研究では、日本におけるフリースクールではどのような教育支援が行われているのか、そこで行われた教育支援は子どもにどのような意義があるのかを検討したい。これらの問題はフリースクールの位置付けと今後のあり方を検討する際に避けて通れない課題になると考えられる。

2. 論文の構成

序章 問題の所在と研究課題

第一章 戦後日本の教育施策とフリースクール運動

第 1 節 戦後教育史作の変容—1980 年代の概観

第 2 節 欧米オルタナティブ教育への関心

第 3 節 不登校とフリースクール運動

第二章 日本におけるフリースクールの現状

第 1 節 不登校に関する政策の動向

第 2 節 フリースクールの全国的な状況

第三章 フリースクールの教育活動——東京シューレ(王子)を事例に——

第 1 節 東京シューレ(王子)の概要

第 2 節 東京シューレ(王子)におけるプログラム

第 3 節 東京シューレ(王子)の教育活動の特徴

第四章 東京シューレ(王子)における子どもへの教育支援

第 1 節 子どもの自己回復

第 2 節 不登校に対する親の意識変容

第 3 節 子どもたちの個性育成

第 4 節 子どもの進路とこれから

第 5 節 東京シューレ(王子)の教育支援

第五章 東京シューレ（王子）の教育支援の現代的意義

第1節「自分らしく生きていく」ことの支援

第2節 東京シューレ（王子）の教育支援の現代的意義

終章 本研究のまとめと今後の課題

第1節 本研究のまとめ

第2節 今後の課題

3. 論文の概要

第一章では、日本においてフリースクールが設置された社会的背景を整理した。1980年代にフリースクールが増加する時代背景としては、戦後の教育制度に問題が現れ、教育制度の再検討を求められるという潮流が高まりつつあったことが挙げられる。また、1980年代には、大沼安史に書かれた『教育に強制入らない—欧米フリースクール取材の旅—』が出版された。この本の出版は、日本においてオルタナティブ教育への関心が高まる一つのきっかけとなった。「登校拒否を考える緊急集会」は、1988年11月12日に、東京シューレやそれに関わる各地の「登校拒否を考える会」（親の会）によって、精神科医・稲村博の朝日新聞夕刊（1988年9月16日）の記事を契機として開催された。この「緊急集会」を契機としたフリースクール運動は、不登校の脱医療化、学校への批判や子どもの権利を主張していた。

第二章では、日本におけるフリースクールの現状を分析した。第1節では、不登校に関わる国の答申や政策を分析した。第2節では、『フリースクール白書』に基づいて、日本のフリースクールの現状を分析した。フリースクール全国ネットワークが実施したフリースクール実態調査によると、日本においてフリースクールを称する団体では、オルタナティブ教育、居場所や塾などの多様な事業が行われていることがわかる。財政的な状況からみると、財政規模が大きいことが一般的である。団体規模からみると、小規模の団体が全体の多くを占めていることがわかる。

第三章では、東京シューレ（王子）を事例として取り上げ、そこで行われている教育活動の分析を通じて、東京シューレ（王子）の活動がどのように子どもの個性の育成や能力の伸長を支えているのかについて分析した。まず、東京シューレ（王子）の概要をまとめた。次に、参与観察を用いて、東京シューレ（王子）で行われた授業・講座、ミーティングなどの活動について考察した。調査によって次のことが明らかになった。すなわち、東京シューレ（王子）では、①強制しない教科学習、②子どもの自治、③幅広い体験的学習の3点を通じて、子どもの主体性を尊重して、無理なく勉強や体験が出来る環境を作っていることが明らかになった。こうした教育活動の中で、子どもの協調性が育まれていくと考えられている。また、子どもは多様な経験を通して、自分のやりたいことを発見して、取り組んでいく。東京シューレ（王子）

では、学習の成果よりも、子どもたちの一人ひとりの違いをみて、彼らの個性を尊重し、できる範囲でなるべく多くのことを体験する環境が提供されている。

第四章では、東京シューレ（王子）に通っている子ども、親、スタッフ、卒業生へのインタビュー調査を実施した。その結果に基づき、東京シューレ（王子）で行われた教育活動や子ども、親とスタッフの関わりなどを分析した。インタビュー調査の結果を踏まえて、子どもの進路やこれからの生活に対するフリースクールの教育的意義を論じた。フリースクールの教育的支援として、①東京シューレ（王子）では、不登校から立ち直る子どもたちが自身の不登校の経験や現状を受け入れ、自分の不登校を一方的に否定して見るのではなく、自信を回復していくことが重視されていると捉えられた。不登校となった自分を全面的に受け入れくれる支援により、子どもたちは自分への肯定的な認識を形成させていた。②東京シューレ（王子）では、幅広い内容の講座や仕事体験などの活動を行い、子どもに多様な選択を提供し、様々なことを体験する機会を用意している。子どもたちは、他人と協調しながら、自分がやりたいことに取り組むことができる。最初から参加していなかった子どもも、様々な活動に参加してみることで、あるいはただ見ているうちに、次第に周りの環境に取り巻かれて、傍観者から参加者になっていくようになる。東京シューレ（王子）は、多様な活動を通じて、子どもがやりたいことに取り組み、やりたいことを発見する過程を支えている。③東京シューレ（王子）では、子どもの不登校経験が肯定され、行動の自由が尊重される。自分の状況に応じて興味のあることだけをやればいいという環境の中で、子どもたちは様々な体験をして、自分が得意なあるいは自分ができることを発見して、自信を回復してくるようになる。

第五章では東京シューレ（王子）の不登校の子どもに対する教育支援の現代的意義について考察した。まず、「不登校選択論」についての議論を分析する。奥地（2004）は、不登校を子どもの権利として主張している。それに対して、貴戸（2004）は、不登校が「やむにやまれぬ」ものとしてあった日本の文脈において、不登校やフリースクールを「選択」と呼ぶことは、初発から矛盾や困難をはらむ実践だったといえよう」と奥地の「選択論」を批判した。そして、不登校当事者の視点から、自分自身の不登校経験を振り返り、その不登校経験は今の生活の関係を再構成していると述べた。さらに、不登校当事者の中には、東京シューレを卒業してから、低学歴などによって不利益に直面している人も存在しているということを指摘している。このような貴戸の指摘に対して、奥地は、東京シューレは設立の当初からフリースクールであるということをはっきりしていると述べている。たしかに、不登校になって、学歴が低いことにより賃金が低いなどという不利益な状況に直面する場合もあると奥地は認めている。しかし、その不利益に直面する原因は、不登校だけではなく、個人的な状況も絡んでいるという。東京シューレ（王子）は、一般的にいう社会的成功（高学歴、高賃金など）のためではなく、子どもが自分らしく生きていくことを支えていると考える。しかし、実際に「自分らしく生きていく」ことができるかどうかは、不登校経験だけではなく、子どもの家庭状況等に深く関わっている

と思われる。不登校になった子どもたちは、家庭や経済的な状況により、現代社会では「自分らしく生きていく」ことができない可能性もある。低学歴により低賃金や不安定雇用などの困難に直面する危険性もある。したがって、不登校の子どもたちの家庭や経済的条件から生じた格差も看過できない。東京シューレ（王子）は学校が主義依然として強い日本社会において、不登校の子どもたちに彼らの不登校を肯定する空間を提供している。東京シューレ（王子）で行われている教育活動では、子どもに多様な体験ができる機会を提供している。東京シューレ（王子）の教育活動やスタッフとの関わりを通じて、不登校の子どもたちは自身の不登校経験に対する肯定的な認識が形成し、「自分らしく生きていく」自信を身につけるようになった。こうしたなかで東京シューレ（王子）は現代の日本社会では、学校主義と対立し、子どもに学校外に教育機会を提供しているといえる。

4. 今後の課題

第一の課題は、フリースクールの卒業生の進路を把握するために、量的調査が必要であると考えられる。本研究では、東京シューレ（王子）の子どもたちの進路を分析するために、3名の卒業生へのインタビュー調査を行った。しかし、東京シューレ（王子）卒業生の進路の全体像を把握できなかった。不登校の子どもへのフリースクールの教育的な意義を明らかにするために、フリースクールの卒業生の進路についての全体的な調査は必要であると考えられる。

第二の課題は、フリースクールの卒業生の進路と家庭や経済的な状況との間の関係性を明確することである。本研究では、東京シューレ（王子）で行われた教育支援は不登校になった子どもたちの進路にどのような意義を持つのかについて考察した。だが、子どもたちの家庭や経済的な条件については十分に検討していなかった。不登校の子どもたちの家庭や経済的条件から格差を生じる可能性があるため、フリースクールの卒業生の進路を分析する際に、家庭や経済的な状況について分析を行う必要があると考えられる。

5. 主要参考文献

- ① 沖田寛子「欧米と日本におけるフリースクールの比較研究—フリースクールの歴史と系譜をめぐって—」（『社会分析』34、1997年、pp. 125-128）
- ② NPO 法人東京シューレ編『フリースクールとはなにか』教育史料出版会 2000年
- ③ 貴戸理恵『不登校は終わらない「選択」の物語から当事者への語りへ』2004年11月20日
- ④ NPO 法人フリースクール全国ネットワーク『フリースクール白書—日本のフリースクールの現状と未来への提言』2004年3月
- ⑤ 吉井健治「不登校を対象とするフリースクールの役割と意義」熊本学園大学社会関係学会『社会関係研究』（第5巻第1・2号、2004、pp. 83-104）